細川俊夫 パッサージュ（通り路）～弦楽四重奏のための（2019）

解説：細川俊夫

2020年はベートーヴェンの生誕250周年ということで、ケルン・フィルハーモニーからの依頼は、ベートーヴェンの会話帳（ベートーヴェンは耳が遠いので、彼と話すときには手書きの文章で問いかけた）からの文章（ベートーヴェンの文章ではなくて、彼の対話者の文章）の返事をベートーヴェンの代わりに音楽作品（弦楽四重奏曲）で書いてほしいというものだった。何を問いかけても、彼の答えは対話者とは異なった次元を見ていたと考えた私は、その答えが対話者を通り抜けて、異なった次元へ飛翔していくという過程を音楽で表現しようと考えた。

音楽は、この世とあの世、現実と夢を結ぶ「通り道」であるというアイディアから、題名の「Passage」をつけた。音を聴きながら、そのパッサージュをゆっくりと通り抜けていく。その通路には、多くの空白（沈黙）の空間があり、その空白を体験することで、音の風景には、奥行きのあるランドスケープが見えてくる。

高崎芸術劇場とケルン・フィルハーモニーの共同委嘱作品で、初演者のアルディッティ・カルテットに捧げる。